修士論文発表（要旨）
２０１０年１月

成人期アトピー性皮膚炎患者の心理特性
―自己の認知とＰＦスタディに表れた
アグレッションの特徴について―

指導　中村延江教授

国際学研究科
人間科学専攻臨床心理学専修
２０８Ｊ５００１
赤坂　豊

目次

序論・・1
第１部　問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
１．アトピー性皮膚炎について
　１）アトピー性皮膚炎の定義
　２）アトピー性皮膚炎の発病とその経過
　３）近年のアトピー性皮膚炎の増加
２．アトピー性皮膚炎とメンタルケア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　１）アトピー性皮膚炎の心身相関
　２）皮膚臨床でのメンタルケアの重要性
　３）アトピー性皮膚炎研究について
３．アトピー性皮膚炎研究の動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　１）先行研究の紹介
　　①心身症の心理特性研究について
　　・心身症患者における病態認識
　　・気管支喘息患者の性格傾向、心理的プロフィール、対人ストレス場面での対応
　　②アトピー性皮膚炎患者の心理特性について
　　・攻撃的衝動心性、自己受容について
　　・ＰＯＭＳの活用
　　③アトピー性皮膚炎患者の痒みと掻破行動について
　　・痒みに対する不安尺度の開発
　　・掻破行動の意味、自覚症状と他覚所見の相違
　　・セルフモニタリング法と掻破行動について
　　④アトピー性皮膚炎患者と家族との関係
　　・親の疾病認知と養育態度との関連
　　・怒り表出と掻破行動および親の養育態度との関連
　　⑤アトピー性皮膚炎への介入やセルフケアの促進
　　・リラクゼーション、イメージ療法について
　　・森田療法、動作法の実施
　　・セルフケア意識の検討
　２）アトピー性皮膚炎研究の今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

第２部　本研究
１．目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　１）研究の意義
　２）研究目的
２．方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　１）調査対象者と実施方法
　２）仮説
　３）質問紙の構成（各尺度の概要やその選択理由）
　　①フェイスシート
　　②自己受容尺度
　　③自己肯定意識尺度
　　④アトピー性皮膚炎心身症尺度
　　⑤ＰＦスタディ
　　⑥アトピー性皮膚炎の症状に対するＶＡＳ

４）分析方法
①分析方法の概要
②分析に用いる変数
③分析ツール

３．結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
１）患者群と一般群の比較
２）患者群内の各々の変数間の関係の分析
３）患者群内の男女差・年齢層の比較
４．考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
１）アトピー性皮膚炎患者の心理的特性・主観的症状・行動的特徴について
①患者群と一般群の比較
②患者群内の各々の変数間の関係の分析
③患者群内の男女差・年齢層の比較
④総合考察
２）アトピー性皮膚炎に対する心理的支援について

５．今後の課題
１）研究を通して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
２）本研究を臨床的な介入に生かすために・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

総論・・50

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68

論文要旨

Ⅰ．問題と目的

アトピー性皮膚炎（以下、ＡＤ）は増悪・寛解を繰り返す掻痒のある湿疹を主病変とする疾患であり、患者の多くはアトピー素因を持つ。近年、この悪化因子にストレスが加えられるようになった 。ストレスとＡＤとの関連は「①ストレスはＡＤの発症・悪化因子の一つである②ＡＤにかかっていることがストレスとなって心理的な苦痛や、社会的機能の低下、ＱＯＬの低下を引き起こす③さまざまなストレスにより治療のコンプライアンスやセルフケアが障害される」とされ、これらの３つの関連はしばしば併存し、相互に関連し合っていると心身症診断・治療ガイドラインで記されている(小牧ら，2006)。また皮膚科学会でも「スキンケアとメンタルケアはアトピー治療の両軸である」とされており、心理的支援の必要性が認められてきている。そのような皮膚科臨床の動きに伴い、そのため、心身医学や臨床心理学でも研究がなされるようになった。

その一つに心理的特性を扱った研究がある。ＡＤ患者の攻撃的衝動心性に注目した土井(2002)や自己受容感との関連を検討した小笠原(2006)などがあり、多岐に渡るものの、まだアトピー性皮膚炎患者の心理的特性が全て明らかになっているわけではない。そのためＡＤ患者の心理的特性について研究を行うことには意義がある。

特に自己の捉え方について深く分析・調査した研究はまだ見当たらない。そこで、先行研究で関連性が示唆された自己受容を中心にＡＤ患者の自己の捉え方を分析する。また自己受容と並行して自己肯定感・ＰＦスタディのアグレッションの観点から行動特徴についても分析し、それらとＡＤの症状の関連性を見るため、主観的症状・心身症の様態の関連性についても検証する。また本研究の結果をもと介入方法についても最後に考察する。

Ⅱ．方法

対象としては「以前に比べ、軽快しにくくなったとされ、メンタル面の影響がより大きく表れやすい」といわれる成人期を中心として、ＡＤと診断されている成人（以下、患者群）40 名とＡＤと診断されておらず過去 6 か月以上頻繁に表れる痒みがない成人（以下、一般群）34 名に質問紙を実施した。また質問紙の内容としては「ＡＤ患者は一般より自己受容や自己肯定が低い」という仮説から「自己受容測定尺度」（沢崎，1993）「自己肯定意識尺度」（平石，1990）、「現在のＡＤの症状を悪いと感じるほど心理的特性が強く現れる」という仮説から「アトピー性皮膚炎心身症尺度」(Ando ら, 2006)「ＡＤ症状の Visual Analog Scale」、「対人場面にて自己や他者の責任の在り方に特徴がある」という仮説から「ＰＦスタディ」を実施した。分析は患者群と一般群の各尺度得点の検定、患者群内の尺度間の得点の相関について分析した。

Ⅲ．結果と考察

本研究の成果は主に３つ挙げられる。１点目はＡＤ患者の自己受容感と自己肯定感の関連を詳細に見られたことである。自己受容測定尺度の中の「身体的自己」「社会的自己」、自己肯定意識尺度の「充実感」にて患者群に有意な低さが表れた。自己受容感・自己肯定感がＡＤと直接的に関連するとは言い難いものの、一部の要素が関連することが明らかになった。２点目は「自己閉鎖性人間不信」などの「ＡＤの悪化に伴って表れる特性」があることが示唆されたことである。症状の度合いに合わせて臨床的介入の内容を検討していく上でも意義のあることであると考えられた。３点目はＡＤと自己表出との関連性が本研究においても示唆されたことである。身体的自己・社会的自己は共に自己受容の中でも患者の表面に現れ、対人場面で影響のある要素である。また行動特徴としても自己表出に特徴が見られ、ＡＤ患者がＡＤを自分ではどうにもならないものとして捉え、自己表出のバランスが崩れていると考えられた。

上記の結果から、「身体的・社会的自己に対する受容感」「日常生活における自己の充実感」を扱いつつ、自己表出を促進する介入をしていくことで症状の改善が見込まれる可能性が示唆された。

参考・引用文献

Ando T・Hashiro M・Noda K・Adachi J・Hosoya R・Kamide R・Ishikawa T・Komaki G(2006),Development and validation of the psychosomatic scale for atopic dermatitis in adults. J Dermatol,33,439-450

青山正紀(2002),成人アトピーの心理と動作療法 MB Derma,58,45-48

平石賢二(1990),青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康— 教育心理学研究,38(3),320-329

平石賢二(1993),青年期における自己意識の発達に関する研究（Ｉ）—自己肯定性次元と自己安定性次元の検討— 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科,37,217-234

細谷律子(2002),アトピー性皮膚炎と森田療法 MB Derma,58,12-18

石田有希・羽白誠・坂野雄二(2003),掻破行動に対するセルフモニタリングについて心身医,43(9),590-597

川島眞・瀧川雅浩・中川秀己・古江増隆・飯島正文・飯塚一・伊藤雅章・塩原哲夫・竹原和彦・環邦彦・宮地良樹・橋本公二・橋本公二・吉川邦彦 (1994). 日本皮膚科学会「アトピー性皮膚炎治療ガイドライン」 「アトピー性皮膚炎診療１００のポイント」（竹原、2002）付録, 174-179

小牧元・久保千春・福士審 (2006). 心身症診断・治療ガイドライン２００６, 250-280

小林美咲(2000),アトピー性皮膚炎患者の掻破行動の検討 日皮会誌,110(3),275-282

小笠原朋子・吉武久美子(2006),アトピー性皮膚炎者の心理状態と自己受容との関連の検討 心身医,46(12),1060

大脇淳子・佐藤みつ子・比江島欣慎(2002),アトピー性皮膚炎児の親の疾病認知と養育態度との関連 山梨医大紀要,19,17-24

長内志津子・八塚美樹・原元子・安田智美・吉井美穂・松井文・田澤賢次・花川博義(2005),セルフモニタリング法を使用した成人型アトピー性皮膚炎患者の掻破行動に関する研究 畠山医科薬科大学看護会誌,6(1),55-64

境玲子・相原道子・石和万美子・根岸昌・松倉節子・高橋一夫・木村博和・大西秀樹・山田和夫・小阪憲司・池澤善郎(2004),アトピー性皮膚炎患者におけるＰＯＭＳの活用（第１報）横断的検討 心身医,44(4),264-269

境玲子・相原道子・石和万美子・根岸昌・松倉節子・高橋一夫・木村博和・大西秀樹・山田和夫・小阪憲司・池澤善郎(2004),アトピー性皮膚炎患者におけるＰＯＭＳの活用（第２報）縦断的検討 心身医,44(4),272-277

沢崎達夫(1993),自己受容に関する研究（１）—新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討— カウンセリング研究,26,29-37

富田美穂・野村忍(2005),成人型アトピー性皮膚炎患者の怒り表出と掻破行動および親の養育態度との関連 人間科学研究,18,43

土井真由子(2002)、アトピー性皮膚炎を抱える人の攻撃的衝動心性に関する研究ＴＡＴ反応をもとに 心理臨床学研究,20(4),394-399

土井真由子(2003)、アトピー性皮膚炎患者のＴＡＴ反応をもとにした語りの構成に関する１研究 心理臨床学研究,20(6),521-532